

コリアの近代化と音楽——その1

小林 孝行*

1. はじめに

コリアの近代化の過程において、音楽はコリアの人々にどのように受容されたか、そしてそれがコリアの近代化にどのように関わっていたかを検討することが、本稿の目的である。ここで、コリアの近代化とは19世紀後半の開国から戦後の南北分断そして現代に至るまでの、西欧や日本との交流などの国際関係の進展と、それに伴うコリア社会の大きな社会変動の過程のことをさしている。もちろん、近代化の過程において、音楽だけを別に取り上げることは困難であるということはいうまでもない。また、ここでいうコリアの近代化を考察するにあたっては、日本との関係が重要な課題となる。1910年から1945年の間では、日本がコリア半島を植民地支配したことに由来する問題ではあるが、戦後も日本は、特に韓国との関係において、政治、経済、文化の面で切り離すことができない。

また、音楽といってもきわめて多様である。時代的にいえば、その社会その時代に固有の「伝統音楽」があり、近代化の過程で他の思想や科学技術とともに非西欧社会に影響を与えた「西欧音楽」がある。現代社会における音楽のジャンルとしては、芸術音楽、大衆音楽、民俗音楽そして児童音楽などに分類もされる。これらのジャンルはそれぞれ特徴をもってはいるが、その境界が明確になっているわけでもない。その上、それらは相互に全く関連がないとはいえず、特に大衆音楽は、「伝統音楽」や「西欧音楽」の影響が大きいといわなければならない。その全てを取り扱うことは、とうてい個人の力では不可能なことなので、本論文では、近代に導入された西欧音楽（洋楽）を中心として扱うことにし、伝統音楽の継承については、この論文を論考するうえで必要な最小限に限りて扱い、本格的な検討は別の機会に行いたい。

この論文は、コリア地域の音楽を対象とする研究であり、音楽社会学の一つの試みであるが、方法としては歴史社会学あるいは社会史ともいえるし、また日本とコリアを対象とした比較社会学ということもできる。

2. 音楽と社会

音楽は古くから芸能の一部として、人間の社会生活の様々な場面、例えば労働の場面やお祭り

* 岡山大学文学部教授

の場面、そして儀礼の場面などの中に深く入り込んで、情緒的に人間の感情に強く働きかけたといえる。

そして、一つの地域では時代ごとに民族ごとに独特の音楽が作り出され、固有の民族文化の一つを形成していたといえる。しかし、その民族に固有の音楽は必ずしも一つであるとは限らない。階層ごとに異なる場合があったし、地域ごとに異なる場合があった。特に支配階級の音楽と民衆の音楽のレベルではかなりの差があったといえるだろう。

ところで、近代化と音楽とはどのような関係にあるのだろうか。W. ヴィオラは音楽史を四つの段階に分け、その第一段階として、先史時代および初期の時代、第二の段階として古代における高度諸文化の音楽、第三の段階として中世初期以降の西洋の芸術音楽、そして第四の段階として、地球上のすべての国々に広がった技術および産業文化の時代における音楽として区分している。彼は西洋音楽の世界的拡散と世界的音楽文化の建設の節で、「南ヨーロッパと西ヨーロッパに根ざしていた西洋文明の音楽は、次第に地球の全域に広がっていった。最初は全ヨーロッパからその辺境の国々へ広がり、次にヨーロッパ人の植民や定住によってアメリカやその他の大陸に広まり、第三にこれらの大陸の土着の人々のあいだや、それまで未開であった人々や、近東から極東にかけての中度文化や高度文化の人々に広まったのであった。この普及の過程で、東ヨーロッパの音楽史でわれわれが親しんでいるのと同じプロセスが、地球の他の地域でも起こったのである。西洋の作曲家の音楽が紹介され、それはこの新しい環境に適応した。土着の作曲家たちは西洋のモデルを模倣し始め、そして最後には土着の特徴と結びついた国民的な傾向が起こった。」(W. ヴィオラ、柿木訳、1970, p.201-202)そして、「宣教師、学校、通商、ラジオ、映画(ときおりはテレビ)、アメリカの会社、個人の財団、発展助成などの多くの力が西洋音楽を他の国に紹介すべく働いており、あるいはそのような傾向に向かっている。」(W. ヴィオラ、柿木訳、1970, p.204)と述べている。

近代化の過程では音楽も他の西洋の思想、宗教、科学技術などとともに、非西洋世界に大きな影響を及ぼしたことは明白である。とりわけ、西欧音楽はキリスト教布教と深い関わりをもっていたことは明らかである。しかし、伝統音楽は近代化の過程で、全てがまったく消失してしまったわけではなく、むしろ伝統主義あるいは民族主義の高揚のなかでは、伝統音楽がそのまま維持されるか、それ以上に強調されることもあったし、中には西欧音楽と結びついて、変容しながらも新たに作り替えられるなどしながら、継承されるものもあった。

近代において、音楽は特に、情緒的な側面から、一方で国家と結びついて、他方では文化産業と結びついて、人々の日常生活や個人の意識に大いに影響を与え、それが民族意識や国民意識の形成、あるいは大衆文化、民族文化の創造をもたらしたといえるであろう。

3. 先行研究あるいは関連研究について

コリアの近代化と音楽に関する音楽社会学の文献は、私の調査した範囲ではいまだ見られないが、音楽学史の観点から全体として、イ・カンスク、キム・チュンミ、ミン・キョンチャン共著「ウリ洋楽100年」、コリアの唱歌などに関する研究としては、ミン・キョンチャンの「韓国唱歌の索引と解題」があり、音楽教育に関してはオ・ジソンの「韓国近代音楽教育」があり、宗教音楽、讃美歌の研究についてはムン・オクペの「韓国讃頌歌100年史」、ミン・キョンベ「韓国教会讃頌歌史」、チョン・チョンイム「初期韓国天主教会音楽」などがあり、大衆音楽に関してはイ・ソンミの「韓国大衆歌謡史」「フナム埠頭のクムスンはどこへ行ったか」などがある。また、文書、音声資料としては、「原典による近代唱歌集成」、「不滅の名歌手」、「留聲器音盤歌詞集」などがある。

日本語の文献としては、コリアの近代音楽史については、関庚燦「韓国における西洋音楽の受容」、大衆音楽に関するものとしては、朴燦鎬「韓国歌謡史」、姜信子「日韓音楽ノート」、音楽教育に関しては安田寛「日韓唱歌の源流」、音楽学に関しては植村幸生「韓国音楽探検」などがある。そして、教育史に関しては金泰勲「近代日韓教育関係史研究序説」などがある。

また、日本の大衆音楽に関する社会学的研究としては見田宗介「近代日本の心情の歴史」がある。これは歌詞分析を中心とした日本の大衆歌謡の古典的な社会学研究ともいえるものであるが、それは小川博司が指摘しているように、大衆音楽ジャンルの多様化やサウンド志向の進展などが見られる現代社会の全ての音楽状況に関する研究には十分対応することはできない。しかしながら、この方法は時代を限定するなど、十分な配慮をすれば、いまだ一つの有効な方法であるには違いない。また、歌詞分析研究では十分に捉えられない、メロディやリズムなどサウンドに関する音楽学的な研究としては小泉文夫「歌謡曲の構造」などがある。

ところで、これまでのコリアの近代化研究では、北も南も、民族史観に基づき、日本の植民地支配の影響を批判し、内在的發展、主体的發展を強調しながら、他方で日本の存在そのものを否定ないしは、度外視する傾向がしばしばみられる。それは政治、経済のみならず文化、音楽においてもよく現れている。コリアへの西洋音楽の導入に関して、朝鮮総督府が実施した学校教育における唱歌の影響よりも、キリスト教や、軍楽隊の影響を強く主張する傾向があった。

それに対して、関は「韓国における西洋音楽の受容」で、「韓国における洋楽には、日本近代音楽の影響を受けたと思われる類似点が多く見いだされる。断片的な例として、唱歌とともに新民謡と童謡が独立したジャンルとして形成されているということ、童謡が民謡と分離されているということ、唱歌、童謡、国民歌謡、歌曲などにヨナ抜き長音階をよくもちいていること、大衆歌謡はヨナ抜き単音階を多く使っていることなども、日本の近代音楽文化と関連づけずには考えられないものといえる。……このような意味から、韓国の近代音楽の形成過程における日本の影響というのは実に多大であったと言わざるをえない。」(関、1994, p.6) また、オは「音楽にお

ける日本の影響については大きく二つの側面に分けることができる。一つは官公立学校で最初に唱歌と音楽という学科目を公式に設定し、学校制度を日本式に改編した点と、もう一つはその学科目内容を日本の音楽教育の内容とした点である。当時の朝鮮の時代的条件を考えると、学校教育を通じた西洋音楽、すなわち日本の学校唱歌の普及は絶対的な影響力をもっていたと見ることができるだろう。なぜなら、当時の讚美歌風の唱歌と愛国歌流の唱歌は西洋音楽受容の体勢が、未だ準備されていない状態で、キリスト教信徒と一部の知識人を対象とし、また統監府から不良唱歌、あるいは安寧秩序を破壊し、風俗を混乱させるという理由で禁止されたため、これらの唱歌は合法的に流通できず、アンダーグラウンドの歌となってしまった。」（オ、2003、pp.45-46）などの記述からも分かるように、近年では、日本の影響力を認め、日本の音楽教育、西洋音楽受容史との関連を厳密に、客観的に比較検討しようという考え方も現れている。日本の植民地支配をどう評価するかという点については、ともかくとして、いずれにしても、当時のコリアの音楽教育および西洋音楽受容史に関して、客観的な実態の検討は意味ある作業である。

西洋音楽の普及に関する日本の役割は、中国に対しても果たされたということができるだろう。「維新運動の失敗後、梁敬超は日本に亡命し、音楽が思想の啓蒙に対して重要な役割を果たすことを重視し、学校における音楽教育と唱歌科目の設立を提唱した。彼は「国民の資質の向上のため、詩歌音楽は精神教育の一要件である」「今後の教育には、唱歌は欠かすことのできない科目であると思う」と強調し、当時の中国の学校の音楽教育科目としての「楽歌」と、その教科書である「学堂楽歌」のなかには、多く日本の学校唱歌が含まれていることを指摘している。

（張、2000、pp.240-241）

このように、西洋音楽の受容と近代学校教育に関しては、日本、コリア、中国、台湾を含めた東アジア地域の比較検討が必要であると思われるが、そのことに関しては、安田が「日韓唱歌の源流」で、音楽教育史の立場から、興味深い研究を行っている。

4. コリアにおける伝統音楽と西欧音楽の導入

コリアの伝統音楽は宮廷音楽と民間（民衆）音楽が存在した。伝統音楽の継承については、宮廷音楽を中心として、雅楽として日本の植民地時代にあっては、李王職雅楽部として密かに継承されたし、解放後（戦後）は、「国楽」という名称で継承され、1950年に国立国楽院が創設され、また音楽大学には国楽科が設置され、中央国楽管弦楽団が設立された。民間（民衆）音楽としては、パンソリ等が歌われ続けたり、新しい民謡として「アリラン」の歌が作られ、引き続いて多くの「新民謡」が作られたりした。そのような伝統的な音楽の音階やリズムは、解放前から現代に至るコリア社会の大衆音楽にも大きな影響を与えている。そして、解放後（戦後）は、民間音楽の一部は、かつての宮廷音楽と一緒に国楽として組み込まれ、伝統民族音楽として継承さ

れている。

コリアにおける西欧音楽の最初の導入は一つには教会、もう一つには軍隊、そしてもう一つには学校を通して行われたとすることができる。そして、その歴史的区分としては、第一の段階は1885年には初めてプロテスタントの宣教師がコリアを訪れ、布教、医療、教育が開始され、1900年には軍楽隊が創設された時期、第二の段階は1905年に統監府、1910年には朝鮮総督府が設置されて、コリア半島における日本の植民地支配が本格化し、朝鮮教育令が施行され、学校教育も総督府のもとで実施された時期、第三の段階は、1920年代後半以降童謡や歌曲という多様なジャンルの音楽が作詞作曲されると同時に、大衆音楽の出現という点では、レコードが普及し始め、ラジオ放送が開始された時期、そして第四の段階は、1940年代の戦時体制下において、唱歌(音楽)も軍国主義的な色彩を帯びるようになった時期に分けることができるだろう。

1945年以前のコリアの西洋音楽について、「ウリ洋楽100年」では、唱歌、童謡、歌曲、そして器楽曲の四つの部門に分けて、説明している。

5. コリアにおける教会音楽

コリアにおける西欧音楽の導入については、もっとも早くは教会音楽の導入であった。キリスト教、特にコリアでは天主教と呼ばれたカトリック教は、すでに朝鮮時代に、朝鮮国内にもたらされている。

「韓国で西洋音楽の出発点は大きく五つに分けて議論されてきた。第一番目は、改新教の讃頌歌の伝播とみる説であり、第二番目は洋楽隊の創設とみる説であり、第三番目にカトリック教の伝来とみる説である。そして最近提起されている鄭斗源が書いた『職方外記』から見なければならないという説が第四番目であり、李圭景の『五州衍文長箋散稿』から見る説が五番目の場合だ。」(イ・カンスク、2001、16)

前述の引用文献において、四番目の説では、『職方外記』は鄭斗源が書いたものとされているが、『職方外記』はマテオリッチが中国において書いた書物で、それを17世紀半ばに陳奏使として明を訪れた鄭斗源がコリアに持ち帰り、初めてコリアにおける西学(西欧科学や、思想)の基礎を作り上げたものである。そこで、西欧の思想、学問の一部として音楽理論が紹介されたものであったが、実際に西洋の音楽が演奏されたことはなかったのである。それを基準とすると、これまで360年以上の歴史があることになる。五番目の説では、李圭景の『五州衍文長箋散稿』には、「音声為楽辨証説」と「欧羅鉄絲琴字譜」で西洋音楽の記譜法と簡単な和声に関して紹介がなされているといわれる。この場合は150年以上の歴史をもつことになる。

中国には、早くから西洋思想やキリスト教が伝えられており、その西洋思想やキリスト教は朝鮮王朝の清王朝への使節である燕行使によって、コリアにもたらされた。コリアでは、西欧思想あるいはキリスト教は西学ないし西教とも呼ばれている。1783年、燕行使として当時の北京を訪

問した李承薫はコリア人としてはじめて受洗し、キリスト教徒となり、1784年には、コリアではじめて天主教会を組織したといわれている。天主教会では何らかの形で教会音楽が存在したと思われるので、そこでは教会音楽に接した人がいたとは思われる。

実際に音楽に接したこととしては、キリスト教の布教という状況があった。「天主教思想を土台として、天主教徒が作り、3/4調、ないし4/4調の音符連続体の歌辞形式をとった歌である。天主歌辞は韓国キリスト教史上、最初の聖歌という点で、伝統歌辞から現代歌辞までの発展の姿を残しているという点で、さらにまた西洋思想の主体的受容様式という点で、教会史的に文化史的に韓国音楽史的に重要に扱わなければならない対象である。」(チョン、2001、25)とも述べられている。ところで、天主歌辞の数は200余を超えるとされる。そしてその発生期といわれる時期(コリアに最初の天主教会が組織された1784年から、最初のキリスト教弾圧(教難)が起こった1801年まで)には、「十戒ミョンガ」と「天主恭敬歌」という二編の天主歌辞が存在したという。(チョン、2001、28)

当時のコリアにおいて、儒教の強い影響のもとで、西教については、何度となく激しい弾圧を受けたのである。そのような状況から考えると教会音楽がコリア人によって継承され、現代に引き継がれてきたとは考えることはなかなか難しい。

開国後、1885年にはアペンゼラー、スクラントン、アンダーウッドら宣教師がコリアを訪れ、布教、医療、教育の実施を実施した。

讃美歌としては、1892年に監理教が「讃美歌」(京城、監理会宣教部、27曲、歌詞編)、1894年に長老会が「讃揚歌」(京城、イエス宣教会堂、117曲、楽譜編)、1899年に浸礼教が「福音讃美」(元山、大韓キリスト教会、54曲、歌詞編)、1903年に、聖公会が「聖会聖歌」(京城、大英国聖公会、歌詞編)、1907年に「福音歌」(京城、東洋宣教会、歌詞編)、1908年に救世軍が「救世軍」(京城、救世軍朝鮮本部、歌詞編)など、教派ごとに、外国人宣教師の手によって出された。

ただし、1885年に宣教師がコリアに入国する以前にすでにコリアでは、中国や日本で洗礼を受けて帰ってきた人々によって、聖書や讃美歌が翻訳され、使われていたともいわれている。また、「当時五線楽譜を読むことができるコリア人信者がめったにいないので、曲を暗記する方法を選ぶしかなかった。従って、大多数のコリア人信者は讃美歌を暗記して歌っていて、このような信者たちに必要なものは楽譜ではなく、歌詞であった。」(ムン、2002、pp.34-35)

また、宣教師たちはコリアでミッションスクールを開設した。アペンゼラーは培材学堂、スクラントン夫人は梨花学堂(1885、ソウル)、アンダーウッドは倣新学校(1886、ソウル)、崇実学校(1897、平壤)が設置され、それらのミッションスクールでは、讃美歌を中心とした音楽が教育された。その詳しい実態ははっきりとはしないが、

「これらの学校では正規的教育活動以外にも、学校の行事にはもちろんの事、ふだんの日でも

必ず国旗である「太極旗」をかかげ、国歌である「愛国歌」を歌わるなど、愛国心の培養に全力を尽くしていたのである。……学部書記官であった隈本は「小学校にありては祈祷、誠名、聖書等教授時数の過半を占め、その余りをもって普通の教科目に充てるも、特に唱歌と体操に費やすところ多し。而して唱歌の歌詞は賛美歌にあらずは愛国歌に属し、体操は運動なる科目を用いて、ラッパ太鼓によれる兵務訓練を行う等、教科書としても偏狭にして排日の文字に富めるものを用いる学校少なからず……」(金泰勲1996, pp. 167-168)

また、「運動会では、民族精神を鼓吹する内容および体力錬磨に関する歌を多数歌わせた。」(金泰勲、1996, pp. 186)などの記述がある。

ところで、ミッションスクールのなかでは、平壤の崇実学校が音楽教育に力を注ぎ、コリア人音楽家を育成した。「崇実学校は1897年創立当初から西北地域の音楽教育の中心地としての役割を果たした。学校では賛美歌から楽譜の読み方、発声法に至るまで教えられ、オルガン部を設置して音楽に才能を示した生徒に専門教育を行った。金仁湜(培材学堂の最初の音楽教師)、金永煥、玄濟明など多くの音楽教師、音楽家を輩出した。」(安田、1999, p. 175)

6. コリアにおける軍楽隊の設立

キムによれば、コリアでは、1895年にロシア式のラッパ隊を設置し、ロシア人教官によって訓練させたという。「これにより曲号隊を設置したが、部校1名、ラッパ手10名、鼓手10名など、総21人組を1個小隊とした。18個連隊に曲号隊1個小隊ずつ配置し、曲号隊1年の予算4千6百8ウォンを策定した。」(キム、2000, p. 60)そして、1897年には、さらにロシア軍人の指導による本格的な軍楽隊養成策が出されたが、実現されなかったともいわれている。

ロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式に朝鮮政府の代表として出席したに閔泳煥の建議によって、1900年12月朝鮮政府は勅令第59号を公布して、軍楽隊を設置した。その第1条では、「軍楽2個隊を設置し、1個隊は侍衛隊に付属し、1個隊は侍衛騎兵隊に付属すること。」とし、第4条では、軍楽隊1個隊の定員として、1等軍楽長(隊長)1名、2等軍楽長(副長)1名、副産校(1等軍楽手)3名、上等兵(2等軍楽手)6名、兵卒(楽手)27名、兵卒(楽工)12名、産校(書記)1名、合計51名と規定した。

その指導者としてドイツ人F. エッケルトが招聘された。コリアでは最初は3年契約であったが、月給300ウォンという(当時の軍楽隊長の月給は30ウォン)破格の待遇であった。エッケルトはプロイセンの士官で、コリアに来るまで日本政府によって招聘され、日本で海軍音楽隊を育成した経歴を持つ人であった。結局、彼は1916年に死ぬまで、コリアに留まって音楽の指導を行った。

エッケルトは「入国当時、ピッコロ、フルート、オーボエ、クラリネット、サキソホーン、トランペット、ホルン、トロンボーン、スーザホーン、バスーン、チューバ、ドラム、トライアン

グル、タンバリン、カスタネット、ベルなどすべてで52種となる新式楽器をもって入ってきた。」(キム、2000、p.61)

1901年には一次としてラッパ手の中から50人が選抜され、1904年には、一般人の中から50名が募集されて、軍楽隊2個隊が編成された。当初は、毎日6時間、音楽理論、読譜法などの音楽理論と楽器演奏の実習が行われ、1901年9月高宗皇帝の誕生日に初めての演奏会が開かれた。

エッケルトはコリアに来て二年目に、韓国皇帝から直接命を受けて、閔泳煥の詩に、朝鮮独自の五音階旋律をベースに西洋音楽の手法を駆使して曲をつけ「大韓帝国愛国歌」を作り、1902年に、正式に閔泳煥の名前で発表された。この曲は近代コリア最初の国歌ともいわれるものである。

「上帝は我が皇帝を助けたまい／聖寿無疆であられて／長寿の祝詞を山のように積み重ね／権威があまねくとどろいて／於天萬歳に福祿が無窮にして／上帝は我が皇帝を助けたまう」(キム、2000、p.63)

「軍楽は言語や文字そのどんな表現よりも、人間の心を感動させる大きな威力をもつ。皇帝陛下におかれては、愛国歌の必要性を強調され、ドイツ教師エッケルトに直接命じられ、作曲されたものである。この楽譜は7音階からなっており、この愛国歌を歌うことにより、われわれ軍人は銃火団結と勇猛心と奮発心を発揮して、忠誠心を呼び起こそう」(キム、2000、pp.63-64)という内容からも、当時のコリア政府として、皇帝を核とした「富国強兵」国家の建設のために、いかにこの軍楽隊に対する期待が大きかったかを知ることができる。

しかし、この愛国歌は「日本の干渉が日増しにひどくなっていく状況にあったため、わずかに国慶日記念の場などや軍隊内でのみうたわれたという。」(朴燦鎬、1987、p.72)

その侍衛連隊軍楽隊は、1907年軍隊が解散されたことにより、後に李王職洋楽隊と改称された。李王職洋楽隊は、日韓併合後は民間団体「京城楽隊」という名称となり、引き続きエッケルトが指導した。1916年エッケルトが死亡した後は、ベ・ウヨンが引き継ぎ活動したが、1923年に解散した。軍楽隊隊員はその後学校バンド、映画音楽、管弦楽団など芸術音楽、大衆音楽、学校音楽などの領域で活躍した。

コリアの西洋音楽史における軍楽隊の果たした役割としては、当時のコリア政府の大きな期待と後援をえて、まず軍楽隊隊員に音楽教育を行ったこと、次に演奏会を開いてコリアの人々に西洋音楽を広く知らしめたこと、そして軍楽隊隊員は解散後もそれぞれの分野で音楽活動を継続し、西洋音楽の普及に努めたことなどがあげられる。

7. コリアにおける学校教育と音楽

近代化の過程で、多くの国々で音楽は学校教育と結びついて、音楽教科の設置、音楽教科書の作成など、音楽教育の実施することによって、多くの国民大衆の中に大きな影響を与えた。ま

た、国歌の創作とその普及も国家意識、国民意識の形成に大きな役割を果たした。

コリアにおける近代教育は1895年、甲午改革に始まる。1895年に、時の国王であった高宗は、洪範十四条を、続いて「教育詔書」を公布し、学部官制、漢城師範学校官制、外国語学校官制、小学校令、1896年に武官学校官制、1899年に、中学校官制、商工学校官制、医学校官制などが勅令として制定され、教育年限、教科書作成、教科目などが定められた。このように学校教育を重視する政策を打ち出したが、そこでは、小学校、中学校などでは、音楽教育は実施されることはなかった。

1905年第二次日韓協約によって、コリアは日本の保護国とされ、統監府が設置された。そこで教育政策としては、1905年、学部官制、成均館官制、1906年に高等学校令、外国語学校令、普通学校令、1907年に高等女学校令、私立学校令が勅令によって制定されている。この時期には、多くの日本人が韓国政府に顧問として採用されるようになったが、学部では、1905年には、4名の日本人が学部学政参与官、学部参与官付通訳官、学部教科書編集嘱託として雇用された他、各種学校、教師および助教師として10名が採用された。

ここで、初めて学校に学校教育に音楽教育が実施されることになる。1906年に普通学校、1908年に高等女学校、1909年に師範学校で「唱歌」あるいは「音楽」という教科目が作られた。音楽教育の目標として、1900年日本で作定されたものとほぼ同一のものが作られた。普通学校の唱歌科目の教授要旨は「平易な歌曲を歌えるようにし、合わせて美感を養い、徳性涵養に助けとなることを要旨とする。唱歌は単音唱歌を学び、歌詞楽譜は平易雅正にして、学政の心情を快活純美とすることを要する」であり、高等学校の音楽科目の教授要旨は「歌曲を歌えるようにし、美感を養い、心情を高揚し、合わせて徳性涵養に助けとなるようにする。」であった。

そこで、普通学校で最初に用いられた教科書は「新編教育唱歌集」である。当時は音楽教科書がなかったため、日本で使用されていたものを、そのまま使用した。従って、歌詞はすべて日本語となっている。続いて、1906年にはやはり、日本で使用されていた「尋常小学唱歌」が発行されている。

学部で独自に発行された教科書としては、「普通唱歌集」(1910年以前発行。ただし、この唱歌集は現存が確認されていない)、「普通教育唱歌集」(27曲収録、58ページ、1910年韓国政府印刷局出版)がある。「普通教育唱歌集」はコリアで最初に作られた学校音楽教科書である。しかし、この教科書を編纂した人は漢城師範学校日本人音楽教師、小出雷吉で、この中には、多くの日本の唱歌が載せられていた。

日韓併合後、1911年に朝鮮教育令が交付され、それを第1次として、1922年に改正されて、第2次教育令が制定され、1938年に改正されて、第3次教育令が制定され、そして1943年には改正されて、第4次教育令が制定され、1945年の解放を迎えることになる。学校の種類は、普通学校(4年制)、高等普通学校(男子、4年制)、女子高等普通学校(女子、3年制)、実業学校(2

年制乃至3年制)および専門学校(3年制乃至4年制)であった。

第1次朝鮮教育令の第2条で、「教育ハ教育ニ関スル勅語ノ趣旨ニ基キ忠良ナル国民ヲ養成スルコトヲ本義トス」そして、第3条で「教育ハ時勢及民度ニ適合セシムルコトヲ期スベシ」として、

第8条では「普通学校ハ児童ニ国民教育ヲ基礎タル普通教育ヲ為ス所ニシテ身体ノ発達ニ留意シ国語ヲ教ヘ徳育ヲ施シ国民タルノ性格ヲ養成シ其生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授ク」、第11条で「高等普通学校ハ男子ニ高等ノ普通教育ヲ為ス所ニシテ常識ヲ養ヒ国民タルノ性格ヲ陶冶シ其ノ生活ニ有用ナル知識技能ヲ授ク」第15条で、「女子高等普通学校ハ女子ニ高等ノ普通教育ヲ為ス所ニシテ婦徳ヲ養ヒ国民タルノ生活ヲ陶冶シ其ノ生活ニ有用ナル知識技能ヲ授ク」、第20条で「実業学校ハ農業、商業、工業等ノ実業ニ従事セムトスル者ニ須要ナル教育ヲ為ス所トス」、第25条で「専門学校ハ高等ノ學術技芸ヲ教授スル所トス」となっている。

時の総督寺内正毅は同令の実施にあたって、「……是ヲ以テ其ノ教育ハ、特ニカヲ徳性ノ涵養ト国語ノ普及トニ致シ、以テ帝国臣民タルノ資質ト品性トヲ具ヘシメムコトヲ要ス。……」という論旨を行っている。

そこで、音楽教育に関して、第1次の教育令において、普通学校規則第13条で、

「第1項 唱歌は平易な歌曲を歌うことができるようにし、心情を純情にし、徳性の涵養に助けとなることを要旨とすること。

「第2項 唱歌は平易な単音唱歌を教え、その歌詞および楽譜は平易雅正で児童の心情を高潔純美にするものを選ばなければならない。

「第3項 唱歌を教える時に、難解な歌詞があれば、説明を加え、その大きな意味を完全に理解させるようにする」と規定し、

高等普通学校では、唱歌の教授要旨として、「唱歌は平易な歌曲を歌うことができるようにし、美感を育て心情を純情にして徳性涵養を要旨とする。唱歌は単音唱歌を教え、時によって輪唱歌、複音唱歌を教える」となり、また、女子高等普通学校では、音楽の教授要旨として、「音楽は音楽に関する知識技能をあたえ、美感を養い、心情を高潔にし、合わせて徳性涵養に助けとなることを要旨とする。音楽は単音唱歌を主として、上品で教育上利益となる歌詞、楽譜を選んで教え、便宜上複音唱歌を加えて楽器使用法を教える。」となっている。(オ、2003、pp.51-53)

第2次教育令のもとでの音楽教育は、普通学校規則第43条で「紀元節、天長節、明治節および元旦には、職員および児童が学校に集まり、次の式を行う。第一に、職員および児童は「君が代」を合唱する。第二に学校長は教育に関する勅語を奉読する。第三に学校長は教育に関する勅語にもとづき、趣旨にあるものを奉読する。第四に職員および児童はその祝日に相当する唱歌を合唱する。」が加えられている。(オ、2003、pp.63-66)

第3次教育令のもとで音楽教育は、小学校規則第26条で、「……歌詞および楽譜は平易雅正に

して、児童の心情を快活、淳美にし、歌詞は可能な限り皇国臣民らしい情緒を涵養するに適切なものを選択する。」とし、第66条では、「唱歌用歌詞および楽譜は朝鮮総督府または文部省選定によるもの、道知事が採用したもの、または使用することのできる教科用図書にあるものおよびその採用小学校と特に関係があるものとし、道知事が朝鮮総督府の認可を得たもの以外に採用することができない。」となっている。

中学校規則でも、第22条で、「……音楽は単音唱歌および重音唱歌を教え、また楽典の大要を教える歌詞および楽譜は学政の心情を快活淳美とするもので、できる限り歌詞は皇国臣民らしい心情を寛容することに適切なものを選択しなければならない」とし、高等女学校規則では、第26条で「……音楽は単音唱歌および重音唱歌を教え、楽器使用法を教える。楽典は高尚優雅で、学生の心情を快活淳美にするようにし、歌詞はできる限り皇国臣民らしい心情を涵養する上で、適切なものを選択する。」とし、師範学校規則では、第24条で「……音楽は単音唱歌または重音唱歌を教え、楽器使用法を教える。歌詞および楽譜は学生の心情を快活純美、高尚優雅とするようにし、歌詞はできる限り皇国臣民らしい情緒を涵養する上で、適切なものを選択する。」としている。(オ、2003、pp.76-78)

第四次教育令のもとで、国民学校規定の芸能と音楽の教授要旨は、「第一に歌曲を正確に歌唱し、音楽鑑賞する能力を育て、皇国臣民」としての情緒を純化するものである。平易な単音唱歌を選び、適当に輪唱歌および重音唱歌を加え、また音楽鑑賞させるものと楽器指導をすることができるようにする。第二に、歌詞および楽典は国民的なもので、児童の心情を快活純美にし、徳性涵養に助けとなるものとする。児童の音楽的資質を開発し高雅な趣味を涵養し国民音楽創造に貢献することができるようにならなければならない。発音および聴音練習を繰り返し行い、自然発生による正しい発音をするようにし、音の高低、強弱、音色、律動などに対する敏感な触覚育成に力を注がなければならない。第三に紀元節、天長説、および1月1日には、〈君が代〉とその祝日に相当する唱歌を合唱する。歌詞および楽譜は1)教科用図書にあるもの、2)朝鮮総督府または文部大臣が選定したもの、3)その図書に対して朝鮮総督または文部大臣が検定したものの、……」とし、中学校の音楽科教授要旨は、「唱歌になれるように音楽鑑賞力を育て、国民的情緒を陶冶し、日本音楽の創造発展に一助となるようにするものである。歌唱法、聴覚訓練、音楽理論、音楽鑑賞を課して、また楽器を課することができる。」とし、師範学校の音楽科教授要旨は「歌唱および器楽に熟練し、音楽鑑賞能力を育て、国民的情緒を陶冶し、日本音楽の創造発展に貢献するという信念を持って教育者たちの資質を成熟させるようにすることと、歌唱法、楽器奏法、聴覚訓練、音楽鑑賞、音楽理論、作曲法、音楽の歴史的発達などを教授する時国民学校芸能と音楽に関する研究を付加しなければならないというものであった。(オ、2003、pp.101-102)

教科書としては、第1次教育令の時代では、「新編唱歌集」と「普通学校唱歌書」がある。「新

「編唱歌集」は1914年に出版され、1920年まで使用された。「新編唱歌集」には41曲が収録され、そのなかでコリア語歌詞のものは3曲（日本語歌詞を翻訳したもの2曲、伝来童謡1曲）だけで、あとはすべて日本語の歌詞であった。なお、この「新編唱歌集」にはローマ字版も出版され、日本語教育の便宜のため使用されたといわれている。

「普通学校唱歌書」は1920年に出版されたもので、各学年1巻ずつとなっている。第1学年用には8曲だけがコリア語歌詞となっているだけで、あとはすべて日本語歌詞であった。

第2次教育令の時代には「普通学校補充唱歌集」が1925年に朝鮮総督府によって編集出版された。この本にはこれまでの教科書から抜粋されたものの他、懸賞をかけて募集され、当選した歌詞に、日本人の作曲家によって作曲された唱歌が何曲か載せられている。そのなかには、「成三問」「昔脱解」などの歴史上の人物を素材としたもの、「金剛山」「白頭山」「京城」「釜山港」などの地名を素材としたもの、「高麗」「百濟」など歴史的時代を素材としたものなどがある。これらの曲はほとんどが日本語歌詞となっている。その背景としては1919年の三一運動を契機として始まった、文化政治の影響によるものと考えられる。また、朝鮮総督府以外で編集された音楽教科書としては「唱歌教材集」「初等唱歌」などがある。その他、中学校、師範学校など上級学校用に編集され、認可された音楽教科書および専門書は、オによる調査（72-75）では1925年4月から1927年7月までの期間で「教範行進アルバム」「オルガン教本」「現代楽典教本」など20冊、そして1931年10月から1932年9月までの期間で「中学音楽教本」「新定音楽教科書」など6冊、1932年10月から1933年9月までの期間で「昭和中等音楽教科書」「中学新音楽教科書」など12冊があるが、ほとんどが日本人によって作成されたものである。

第3次教育令の時代では、朝鮮総督府による編集としては「みくにのうた」と「初等唱歌」がある。「みくにのうた」はその名前からもわかるように、皇国臣民化をいっそう推し進めたもので、儀式唱歌や軍国主義的な唱歌が多数載せられている。儀式用唱歌としては、「君が代」「勅語奉答」「一月一日」「紀元節」「天長節」「明治節」「神社参拝唱歌」「海ゆかば」「仰げば尊し」「螢の光」「愛国行進曲」など11曲が載せられている。「初等唱歌」では、これまでの教科書に載せられたものを再収録した他に、皇国臣民化が強調され、軍人を崇拜する内容の唱歌や行進曲など、さらに児童の作詞した唱歌などが多く載せられている。児童の作詞した唱歌としては、1学年用では「春」「ワタシハ一年生」「シロ」「水アソビ」「大寒小寒」「風あげ」「お母さん」の7曲、2学年用では、「鬼ごっこ」「鉄かぶと」「ラジオ」「水兵サン」「遠足」「子牛」「ひなまつり」「お父さん」の8曲がある。

このようにコリアにおける学校教育における唱歌は、「美感を養い、心情を高潔にし、徳性の涵養を図る」という趣旨のもとに、学校教育政策と同様、基本的に日本人化を求めるものであった。また教科用図書を日本の文部省、朝鮮総督府、道知事によって認められたものに限定し、それ以外のものを不許可にし、規制を強めた。ただし、第2次教育令では「君が代」などの国歌や

儀式唱歌の合唱が定められ、第3次教育令でははっきりと「皇国臣民」が謳われるなど、規制を強化し、徹底した日本人化が進められた。

参考文献

日本語

- 安準模『韓国歌の旅』白帝社、2003
植村幸生『韓国音楽探検』音楽の友社、1998
遠藤喜美子『鳳仙花 評伝・洪蘭坡』文芸社、2002
小川博司「ポピュラー音楽へのアプローチ」井上俊編『新版現代文化を学ぶ人のために』世界思想社、1998
姜信子『日韓音楽ノート』岩波書店、1998
金泰勲『近代日韓教育関係史序説』雄山閣、1996
小泉文夫『歌謡曲の構造』冬樹社、1984
櫻井哲男『アジア音楽の世界』世界思想社、1997
朴燦鎬『韓国歌謡史』晶文社、1989
張前「中国学校唱歌をめぐる」『原典による近代唱歌集成、解説・論文・索引』安田寛編『原典による近代唱歌集成』ビクターエンタテインメント株式会社、2000
朴成泰「韓国近代音楽教育史研究の意義と方法」『音楽教育学研究1』音楽の友社、2000
見田宗介『近代日本の心情の歴史』講談社、1967
関庚燦『韓国における西洋音楽の受容』東京芸術大学、修士論文、1994
安田寛『日韓唱歌の源流』音楽の友社、1999
安田寛編『原典による近代唱歌集成』ビクターエンタテインメント株式会社、2000
W. ヴィオラ著、柿木吾郎訳『世界音楽史』音楽の友社、1970

コリア語

- 김지평『한국 가요 정신사』아름출판사、2000
문옥배『한국 찬송가 100 년사』예술、2002
민경찬『한국 창가의 색인 의 해제』현암사、2001
『불멸의 면가수』신나라、1996
오지선『한국 근대 음악 교육』예술、2003
이강숙, 김춘미, 민경찬 편『우리양악 100년』현암사、2001
이영미『한국 대중가요사』시공사、1999
이영미『홍남부두의 금순이는 어디로 갔을까』황금가지、2003
전정임『초기 한국 천주교회 음악』한국예술종합학교 한국예술연구소、2001
최창호『민족 수난기의 대중가요사』일월서각、2000
『일제잔재 19 가지』가람기획、1994
『한국민족문화대백과사전』한국정신문화연구원、1991
韓国古音盤研究会編『留聲器音盤 歌詞集』1、2、民族苑、1990